論文

紀元前5千年紀イラン南西部における土器生産組織と村落共同体の変遷
―工芸品の生産組織への関係論的アプローチ―

三木 健裕*

Transformation in Organization of Pottery Production and Village Communities in the 5th Millennium BCE of Southwestern Iran: A Relational Approach to the Organization of Craft Production

Takehiro MIKI

鈍黄色地黒彩の彩文土器はイラン南西部ファールス地方マルヴ・ダシュト平原において、紀元前5千年紀はじめに受容され展開した。この彩文土器の生産組織は、当該地域での工芸の専業化や社会の複雑化を明らかにするため研究されてきた。本論文ではこの土器生産組織を、エンタングルメント理論と実践共同体論に依拠しつつ、組織を人間とモノの間の無数の関係性と捉える関係論的な視座から議論する。当該地域に所在する時期の異なる3遺跡（タル・イ・ジャリA遺跡、タル・イ・ギャプ遺跡、タル・イ・バクーンA遺跡）における土器生産組織と村落共同体の比較を行い、人間と彩文土器の関係性がどのように変化したかを論じる。

キーワード：土器生産組織、イラン南西部、銅石器時代、エンタングルメント理論、実践共同体

Black-on-buff painted pottery was adopted at the beginning of the 5th millennium BCE in Fars province, southwestern Iran. In considering village development in the 5th millennium BCE, the black-on-buff painted pottery has been investigated in order to clarify the organization of pottery production as a clue to craft specialization and social complexity. In previous studies, the organization of pottery production was pursued as craft production system. In this study, the author discusses the organization of pottery production from a relational perspective that regards its organization as relations between humans and things engaged in pottery production. For this purpose, the author adopts Ian Hodder's entanglement theory and Jean Lave and Etienne Wenger's community of practice. The author undertook holistic analyses of the black-on-buff painted pottery and other remains excavated from Tall-e Jari A (the Early phase), Tall-e Gap (the Middle phase), and Tall-e Bakun A (the Late phase) in the Marv Dasht Plain. By comparing organizations of pottery production and village communities in these sites, the author considers how the relationship between humans and the painted pottery transformed.

Keywords: organization of pottery production, southwestern Iran, Chalcolithic, entanglement theory, community of practice

1. はじめに

西アジア銅石器時代に該当する紀元前5千年紀は従来、新石器時代に確立された農耕村落社会が円熟し、社会が複雑化していき都市化へ向かう途上として、理解・議論されてきた（Pollock 1999; 小泉 2016）。このような当該期に関する理解は、考古学的証拠を丹念に観察・分析し、解像度のより細かい議論を行うことで検証を進める必要がある。このような変化の詳細を考古学的証拠からアプローチするために着目されてきたのが工芸品の生産組織、特に土器生産組織である。本稿は土器生産組織を論じることで紀元前5千年紀の社会変化の詳細をより良く理解することを目指す。

本稿ではイラン南西部ファールス地方マルヴ・ダシュト（Marv Dasht）平原の前5千年紀の文化期であるバクーン期（Bakun、放射性炭素年代をもとにおよそ前5000–4100年）を対象とする。バクーン期の土器は先行する土器新石器時代シャムサバード期（Shamsabad、およそ前5500–5000年）の土器、後続する銅石器時代ラピュイ期（Lapui、およそ前4100–3500年）の土器と異なり、鈍黄色の地に黒色の彩文が描かれ、さらに土器焼成窯で焼成された鈍黄色黒彩土器（black-on-buff ware、以下彩文土器）が

*日本学術振興会海外特別研究員　JSPS Overseas Research Fellow

西アジア考古学　第22号　2021年　37–54頁　© 日本西アジア考古学会

主体的である。筆者は本論文においてバクーン期の土器生産に関する組織、およびその組織と村落共同体の関係に関する問題を提起する。以下、次章で先行研究とその問題点をまとめ、第3章では分析対象を提示するとともに、人間とモノの関係に着目した関係論的視点による、実践共同体論とエンタングルメント理論を援用した土器生産組織の分析方法を提示する。その後タル・イ・ジャリA（Tall-e Jari A）遺跡（第4章）、タル・イ・ギャプ（Tall-e Gap）遺跡（第5章）、タル・イ・バクーンA（Tall-e Bakun A）遺跡（第6章）における土器づくり共同体と村落共同体に関して個別に論じていくとともに、前の時期の遺跡と比較してどのような変化を見せたのかも探っていく。最後に、関係論的視点から得られた土器生産組織に関する解釈を、工芸の専業化に取り組む従来の観点から得られた解釈と対置させることで（第7章）、関係論的視点の意義を確認し、今後の課題を述べる。

2. バクーン期における土器生産組織の先行研究

1920～30年代にバクーン期の標式遺跡であるタル・イ・バクーンA（以下バクーンA）遺跡が発掘された当初から、土器焼成窯など彩文土器の生産に関わる遺構が発見されていた（Herzfeld 1932; Langsdorff and McCown 1942）。この証拠や彩文土器の観察結果をもとにE. ヘルツフェルト（Herzfeld）は、この遺跡の土器生産組織は専業的ではなく、村落内に居住するあらゆる人間が土器づくりに従事していたと考察した（Herzfeld 1941: 19）。その後1950年代から1980年代にかけて、バクーン期の遺跡発掘事例が増加し、土器生産組織を論じるための基礎的な考古学的証拠が蓄積されていくが、土器生産組織自体の議論に関しては、1980年代になるまであまり見られない。

1980年代以降になると、ヘルツフェルトの評価とは異なり、バクーン期の土器生産組織には専業工人が存在したという主張がみられるようになる（Alizadeh 1988, 2006; Sumner 1994）。これらの主張は生産組織をシステムと捉え、工芸の専業化と社会の複雑化の相関を前提に土器生産組織にアプローチする、システム論的な観点（三木 2020）のもと、バクーン期の土器生産組織に関する変数、生産類型を議論した。このうちアリザーデはバクーンA遺跡において、石製スタンプ印章を用いて管理・貯蔵活動を行う北発掘区と工房地区である中央・南発掘区が分離していると解釈した。そしてこの遺跡における彩文土器生産は、石製スタンプ印章を用いて管理活動を行うエリートに従属した専業工人が、工房地区において従事したと主張した（Alizadeh 1988）。W. サムナー（Sumner）も踏査で確認された遺跡の大部分には土器生産に関連する遺物がみられないこと、彩文土器にみられる巧みな筆致から専業的な生産組織の存在を主張した（Sumner 1994）。

その一方、バクーンA遺跡北発掘区の建造物ユニットAにおける遺物の出土状況を詳細に再検討した久米は、北発掘区内でも製陶具が偏在することを指摘し、アリザーデの主張する居住区間の機能分化を批判するとともに、世帯群内での非常勤専業生産の可能性を指摘した（久米 2001）。バクーンA遺跡中央・南発掘区のデータを追加してさらに再検討を試みたJ. フレイザー（Fraser）も同様に、アリザーデの解釈とは異なり、土器生産に関連する遺構はある地区に集中するのではなく遺跡全体にみられること、石製スタンプ印章はエリートの存在を示すとはいえないことを示した（Fraser 2008）。これを基にフレイザーは、彩文土器づくりはエリートに従属した専業工人が行なっていたわけではないと主張し、拡大世帯内において世帯レベルで彩文土器づくりが行われた可能性を示唆した。

以上、対立意見がみとめられる先行研究に対して、筆者は2つの問題点を指摘する。1点目は、これまでの研究ではバクーン後期のバクーンA遺跡のみに基づいてバクーン期の土器生産組織を論じており、バクーン前、中期の土器生産組織、および土器生産組織の通時的変化に関しては全く論じられていない点である。

2点目はこれまでの研究が生産組織を論じるにあたり立脚してきたシステム論的観点、すなわち工芸の専業化を前提として、どのような種類の専業が組織されていたのかを考える観点である。筆者は別稿において、生産組織におけるシステム論的観点には、生産組織を閉じたシステムと見て、専業／非専業という区分や既知の生産類型に当てはめて判断しようとする点、変数に分解する要素還元的手法などの問題点があると指摘した（三木 2020: 54）。そしてこのシステム論的観点への対案の一つとして筆者は、B. ラトゥール（Latour）のアクター・ネットワーク理論、I. ホダー（Hodder）のエンタングルメント理論に依拠しつつ、生産組織を人間とモノの間のさまざまな関係性として捉え直す、関係論的アプローチを提案した（Hodder 2012; ラトゥール 2019; 三木 2020）。さらに実践共同体（レイヴ・ウェンガー 1993; Wenger 1998）、インゴルドのスキル概念（Ingold 2000）から生産組織における学習、スキルという観点を取り入れることで、関係論的アプローチのアップデートを試みた。

筆者は以上2つの問題点を克服するため、第1にバクーンA遺跡に先行する2つの遺跡における土器生産組織を新たに論じ、土器生産組織の通時的変化を議論できるようにする。第2に各遺跡の土器生産組織を

論じるにあたっては関係論的視点に立ち、見習いから熟達した陶工まで様々なスキルを有した陶工が属する彩文土器づくりの実践共同体と、村落共同体内における人間とモノの多様な関係性のあり様を考察する。

3. 分析対象と分析方法

分析対象遺跡と資料

筆者はバクーン期における土器生産組織とその変化を論じるにあたり、タル・イ・ジャリ A 遺跡、タル・イ・ギャプ遺跡、タル・イ・バクーン A 遺跡（図 1）の 3 つを取り上げる。これらの遺跡はいずれも 1950 年代に東京大学イラク・イラン遺跡調査団の手によって発掘がなされている（江上・曽野編 1962; 江上・増田編 1962; Egami 1967; Egami et al. 1977）。筆者は 3 遺跡から出土した資料に関して、報告書情報および東京大学総合研究博物館に所蔵されている資料を中心に用いる。

タル・イ・ジャリ A（以下ジャリ A）遺跡は土器新石器時代であるジャリ期（III 層）、シャムサバード期（II 層）、そしてバクーン期（I 層）の 3 層からなり、各層で建造物が確認されている、直径約 100 m（およそ 0.8 ha）の小規模なテル型遺跡である。I 層から出土したサンプルの放射性炭素年代測定の結果、前 5210–4995 年（2σ）という較正年代が得られている（三木 2014）。タル・イ・ギャプ（以下ギャプ）遺跡は総計 20 層からなる直径約 120 m（およそ 1.1 ha）のテル型遺跡であり、建造物が数層にわたって検出されている（江上・曽野編 1962）。1959 年の調査の際に採取されたサンプルを対象に放射性炭素年代測定を行った結果、最下層からは前 4720–4610 年（2σ）、5b 層からは前 4555–4450 年（2σ）という較正年代が得られた（三木 2013a）。最後にバクーン A 遺跡は 1920 年代以来、日本隊を含めてこれまで数多くの調査隊によって発掘がなされている（Herzfeld 1932; Langsdorff and McCown 1942; 江上・増田編 1962; Alizadeh et al. 2004）。遺跡の大きさは長さ 150 m、幅 120 m（およそ 1.8 ha）であり、遺跡面積という点で先の 2 遺跡とそれほど違いは見られない。4 層確認されており、火事が起きたためか、土器などの遺物、ピゼ建造物といった遺構の残存状況・検出状況が非常に良好で、前章で紹介したように、社会組織、土器生産組織に関するさまざまな研究が行われてきた（Herzfeld 1941; Sumner 1972, 1994; Alizadeh 1988, 2006; 久米 2001; Fraser 2008）。アリザーデが 2003 年に行った小規模な発掘から得られた炭化物サンプルの放射性炭素年代測定の結果、およそ前 4400 から 4300 年という較正年代が得られた（Alizadeh 2006）。以上の 3 遺跡はバクーン期における存続期間が異なり、これらを検討することでバクーン期の土器生産組織の通時的変化を議論することができる。筆者はこれまで、これらの遺跡から出土した彩文土器に関する様々な属性（ウェア組成、器形、法量、製作技術、文様、施文スキル、記載岩石学的特徴、化学組成）を分析してきた（三木 2013b, 2014, 2015; Miki 2020, 2021, in prep）。筆者はこれらの分析結果を、土器生産組織を論じる上での材料として扱う。

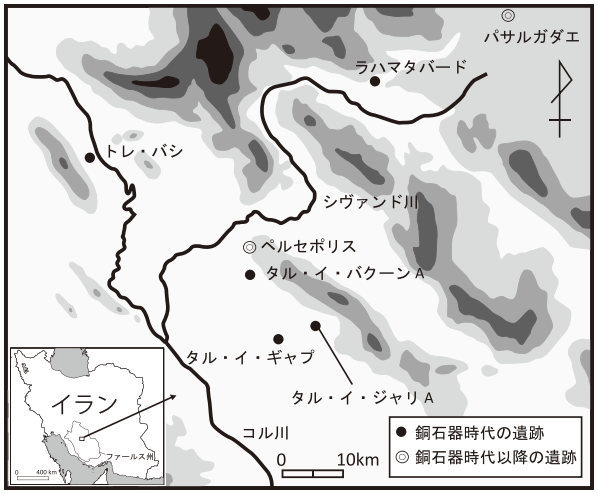

図 1　イラン南西部ファールス州、マルヴ・ダシュト平原に所在する銅石器時代の遺跡地図

分析方法：関係論的アプローチ

筆者は別稿において土器生産組織における関係論的アプローチならびに実践共同体論の理論的基盤を論じた（三木 2020）。その中でこのアプローチにおいて描かれる模式図を、ギャプ遺跡を事例として示した（三木 2020: 図 5, 54–56）。紙幅の都合上、本稿ではこの理論的背景の詳細には触れられないため、先に挙げた別稿を参照いただきたい。ここではこの方法に関して、特にホダーのエンタングルメント理論において提唱されたタングルグラム（tanglegram）、および K. デュイスターマート（Duistermaat）によるタングルグラムの土器生産組織への適用例に絞って説明する（Duistermaat 2016）。ホダーはエンタングルメント（entanglement：人間とモノの間の関係性の絡み合い）において、人間とモノがどのように正と負の依存関係で結ばれていくかを論じている（Hodder 2012）。ホダーはこの関係性を可視化するために、タングルグラムという模式図を提案する。タングルグラムでは、多種多様なモノを節点（node）として登場させ、遺跡から得られた考古学的な証拠やその分析から明らかとなったモノ同士の関係性を、そのモノ同士を線でつなぐことで可視化する。デュイスターマートは土器生産組織をタングルグラムで可視化するにあた

り、モノだけでなく土器の属性や物質的特質といった異種混淆な情報をも節点として追加している。

土器属性のタングルグラムと村落共同体内のエンタングルメント

土器づくりの実践共同体と村落共同体における人間とモノの関係性を論じるために、筆者は 1）土器属性のタングルグラムと 2）村落共同体内のエンタングルメントという、2 種類のタイプのタングルグラムを提示する。前者の土器属性のタングルグラム（図 3, 5, 7）では、土器の属性および属性に関連する情報・活動・人間が、同一属性の共有という関係性を中心にして線でつなげられていく。

ある土器の属性は他の土器の属性と多数の関係性で結びついているため、筆者は特定の重要な属性を主観的に選択し、タングルグラムの中心に配置した。このようにタングルグラムを可視化する上で特定の属性を中心に配置する方法は、ホダーと A. モル（Mol）の「エゴ・ネットワーク」から採用した（Hodder and Mol 2015）。これにより特定の属性（エゴ）とそれに隣接する属性に焦点を絞って可視化することができる。本稿では、ある遺跡における土器の属性同士の関係を示すためのハブとして、外面に文様が施された鉢形土器を、中心に据える土器属性として選択した（図 3, 5, 7）。紙幅の都合上、内面に彩文が描かれた鉢形土器や壺形土器のような器形や、植物質混和粗製土器を中心に据えたタングルグラムに関しては本稿では提示しない。そのため、以下提示されるタングルグラムには、可視化されていないが重要な関係性が多数存在する。このハブを取り囲むように以下の 11 の土器属性を配置し、ハブとつないだ。

1）ウェア組成における彩文土器の割合
2）彩文土器の出土密度
3）器形組成における、外面に彩文が施された鉢形土器の割合
4）口縁部・底部の形態
5）口縁部の角度、口縁部径、器高
6）推定される器形
7）代表的な文様要素
8）文様構造
9）土器製作技術における製作工程
10）施文スキルスコアのヒストグラム
11）彩文土器づくりの実践共同体、熟達した陶工、見習い

以下、土器属性のタングルグラムで取り上げる彩文土器の各属性の詳細を紹介し、各属性がジャリ A 遺跡からバクーン A 遺跡の時期にかけてどのように変化したかを簡潔に示す。ウェア組成における彩文土器の割合（1）は、各遺跡での完形土器と口縁部片におけるウェア組成の分析結果を使用した。図 2：A はジャリ A 遺跡からギャプ遺跡の時期にかけて、彩文土器の割合が急増したことを示している。また、発掘トレンチにおける彩文土器の密度（2）に関しては、各遺跡での 1 m^3 あたりの出土点数および重量の分析結果を使用した。その結果は以下の通りである：1.5 点および 28 g（ジャリ A 遺跡 C 区）、79.9 点および 2464 g（ギャプ遺跡 GAT-1 区）、39.1 点および 1057 g（ギャプ遺跡 GAT-2 区）、18.8 点および 601 g（バクーン A 遺跡日本隊発掘区）。ジャリ A 遺跡からギャプ遺跡にかけて彩文土器の絶対量が激増したことがわかる。

外面に彩文が施された鉢形土器の割合（3）に関しては、各遺跡での完形土器と口縁部片における割合を採用した。図 2：B からは外面に彩文が描かれた鉢形土器が増加し、大型壺形土器も出現する様子が読み取れた。口縁部の角度、口縁部径、器高（4）に関しては、報告書（ギャプ、バクーン A）および東京大学所蔵資料（ジャリ A、ギャプ）を計測して得られた、外面に彩文が施された鉢形土器におけるそれらの最大値、最小値、中央値を示した。口縁部角度の算出法については図 2：E の OF1 に示した。図 2：C からは口縁部角度が微かに開いていく傾向、口縁部径は徐々に増大し、最大最小値の幅が広がる傾向、器高は高くなる傾向が読み取れた。また各遺跡の口縁部・底部形態（5）は東京大学所蔵資料の分析結果（ジャリ A、ギャプ）、および発掘報告書の集成結果（バクーン A）を示したものである。図 2：D にバクーン期に確認された口縁部（R1-R6）、底部（B1-B13）の形態の分類案を示し、分析結果は土器属性のタングルグラム内で示した。口縁部形態の変化は乏しいのに対し、底部形態は時期が下るにつれ平底（B7）が増加し、バクーン A 遺跡になると多様な形態が見られる。推定される器形（6）とは、「外面に彩文が施された鉢形土器」という土器片分類時の器形カテゴリから、先の口縁部径や角度といった属性を基に本来の器形を推定したものである。図 2：E で公刊資料をもとに 9 つの開口した土器の器形分類案（OF1-OF9）を示し、分析結果を土器属性のタングルグラム内で示した。ジャリ A 遺跡は器形の有無のみ示したが、ギャプ、バクーン A 両遺跡では公刊された多数の完形土器資料を使用できたため、各器形の割合を提示した。通時的に器形のヴァリエーションが増大する傾向がみとめられた。

文様に関しては装飾帯に描かれる文様要素と、黒色帯などによって構成される文様構造に分けて検討した。文様要素（7）については、土器属性のタングルグラムにて代表的な文様の実測図を提示した。時期が下るにつれ、文様要素の種類が増加し、複雑なデザイ

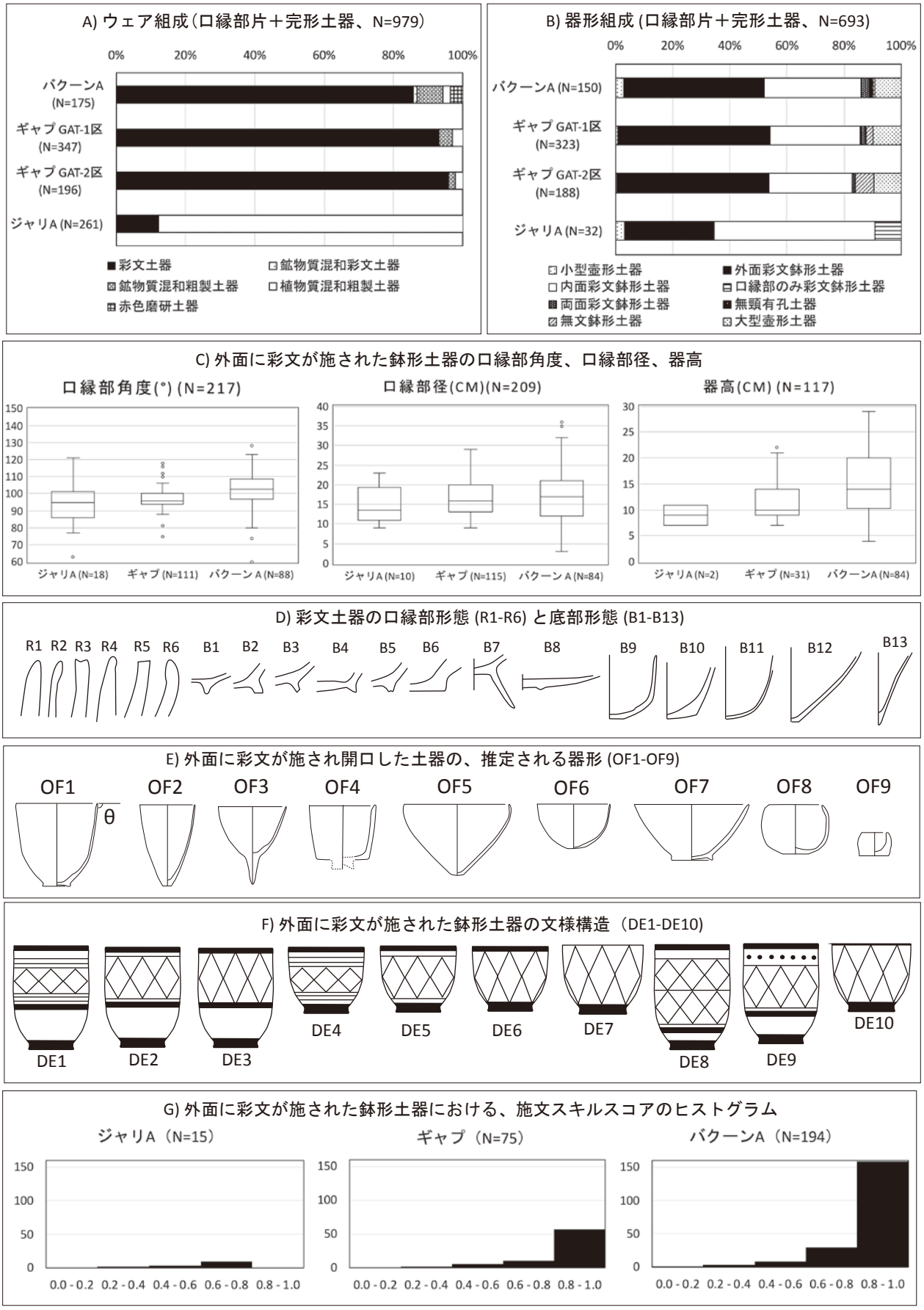

図 2　土器属性のタングルグラムで用いる土器属性の、3 遺跡での分析結果（A、B、C、G）と分類案（D、E、F）

ンがみとめられるようになる。いっぽう文様構造（8）については図2：Fにおいて、外面に彩文が施された鉢形土器にみとめられた10の文様構造のパターン（DE1–DE10）を示した。土器属性のタングルグラムにて、各遺跡で確認された文様構造パターンの出現頻度を円グラフで表記した。胴部上半に描く文様構造（DE1–DE3）から胴部全体へ描く文様構造（DE4–DE7）へ遷移していく。

筆者は土器製作技術に関しては、製作工程と技能（スキル）の側面を検討した。前者の製作工程（9）に関しては、東京大学所蔵資料およびシカゴ大学オリエント研究所所蔵資料の観察結果（三木 2015）、および彩文土器胎土の薄片記載岩石学分析、理化学分析の結果（Miki 2020）を、粘土の採取から焼成までの7工程に分けて、土器属性のタングルグラム内でまとめた。各工程において細かな変化は存在するものの、他の土器属性ほど（例えばウェア組成や密度など）顕著な通時的変化は認められなかった。後者の技能に関しては、特に施文スキルの定量化（10）を試みた。彩文の施された完形土器、残存状態の良い土器、もしくは実測図を対象に、文様の重複、はみ出し、歪みを観察し、各資料につき0–1の数値で施文スキルスコアとして定量化した上で、遺跡ごとにまとめてヒストグラムで表現した（Miki 2020, in prep）。このヒストグラムでは0以上0.2未満、というようにスコアを0.2ごとに区切り表現した。このスコアを3遺跡間で比較すると、時期が下るにつれて0.8–1.0という高いスキルスコアが優勢になっていく様子が確認された（図2：G）。以上、10の土器属性の時間変化を切り離して個別に提示したが、次章以降では土器属性のタングルグラムを用いて、遺跡ごとにこれらをまとめて提示することにより、一遺跡内における土器属性間の関係性に着目して論じたい。

さらにタングルグラムを用いた議論の焦点となる、見習いや様々な熟達した陶工からなる彩文土器づくりの実践共同体（11）も土器属性のタングルグラムに加えている。ここでいう実践共同体とは、ある実践を習得し、次世代へ伝達する場としての共同体を指す（レイヴ・ウェンガー 1993）。実践共同体論では特に、その共同体内へ見習いが新たに参加し学習する際に、共同体の周辺での雑事から、共同体の中心での熟達した人間が行う重要な作業へと向かう過程「正統的周辺参加（legitimate peripheral participation）」を重視する。次章からはここまで挙げた10の土器属性とそれら同士の関係性を遺跡レベルで見ていく。その作業を通して実践共同体の実態、すなわち知識・技能の学習・伝達メカニズムを探る。この作業にあたっては、実践共同体内における見習いと熟達者の割合を間接的に示す施文スキルスコアのヒストグラム（9）が他の属性と比べ、特に重要である。

第2のタングルグラムは村落共同体内のエンタングルメントである（図4, 6, 8）。このタングルグラムでは、ある村落共同体（遺跡）の中における彩文土器づくりの共同体、生業やその他の工芸品生産（打製石器、磨製石器、銅製品など）に関与する実践共同体、物質（粘土、土器焼成窯、燃料など）をつなげていき、村落共同体内のさまざまなモノと実践共同体の間の関係性を可視化する。このタングルグラムでは依存関係に基づいてモノと実践共同体がつながれ、矢印で依存関係が表現される。ホダーが指摘するように、人間はあらゆるモノと関係を持っており（Hodder 2012: 182）、タングルグラムに登場させると無数の線を引く必要がある。そこで本稿においてこのタングルグラムでは、陶工以外の人間を可視化することはしない。そして個としての人間の代わりに、村落共同体内の実践に関与する実践共同体を可視化する。発掘調査報告書や東京大学所蔵資料に基づいて、村落共同体内に存在したモノや実践共同体を節点として追加していく（Miki 2020）。

ただし、村落共同体内のエンタングルメントを可視化するにあたっては、いくつかの問題点があらかじめ存在する。第1に前稿で指摘したように、遺跡からは見つかっているが報告されていないモノ、残らないモノなども考慮する必要がある（三木 2020: 54）。第2にタングルグラムに何を登場させ、何と結びつけるかは依然主観的な判断に留まっている点が挙げられる。人間とモノの間の関係性に焦点を当てた近年の研究では、これらの関係性をより客観的、定量的に可視化して議論するために、社会ネットワーク分析から派生した分析手法が採用されている（Knappett 2011; Hodder and Mol 2015; Mills 2017; Peeples 2018; Donnellann ed. 2020）。今回本稿ではこのような社会ネットワーク分析を応用した手法は採用しない。しかし今後、このような学際的なアプローチを用いて、関係論的なアプローチを発展させていくことができる。

4. ジャリA遺跡におけるエンタングルメントと実践共同体

ジャリA遺跡における土器属性のタングルグラムと彩文土器づくりの共同体

それでは土器属性そのもの、および図3で示した土器属性同士の関係性を考慮に入れながら、ジャリA遺跡I層（およそ前5000年）における彩文土器づくりの共同体に関する考察から始める。筆者は別稿にて、実践共同体を論じるにあたり、徒弟制に関する民族誌を参照した（三木 2020: 52）。その結果、実践共同体を探る上で重要な、以下の4つの項目を設定し

た。(三木 2020: 52)。

1) 何歳から徒弟制が始まり、学習の各段階へ移行していくのか。
2) どのように、そして何を見習いは実践共同体で学習するのか。
3) 教える側と見習いの間にはどのような関係が存在するのか。
4) 徒弟制は生計を立てるための学習以外に、どのような役割を果たすのか。

ジャリ A 遺跡での彩文土器づくり共同体の実態を論じる上で、ウェア組成における彩文土器の割合および発掘区 1 m^3 当たりの出土点数（密度）が非常に低く（約 10%、1.5 点 / m^3)、対照的に無文の植物質混和粗製土器の割合と密度が高い（90%、14.3 点 / m^3）点が重要である。このことは新石器時代以来の伝統である植物質混和粗製土器づくりに比べ、彩文土器づくりの頻度と彩文土器づくりの知識を伝達する頻度が極めて低いか、あるいは彩文土器が搬入された可能性を示唆している。彩文土器の少なさと並行して、ジャリ A 遺跡での文様・器形のヴァリエーションは乏しく、彩文土器の施文スキルスコアも低い。

また彩文土器の製作技術は、無文の植物質混和粗製土器とは異なり、施文や土器焼成窯を用いた高温焼成といった製作工程が存在する。そしてこの施文や高温焼成においては、ジャリ A 遺跡 I 層以前には認められない技術が必要である。さらに化学組成の分析結果では、彩文土器と植物質混和粗製土器の粘土の産地の類似性が指摘された（Miki 2020)。彩文土器がマルヴ・ダシュト平原内近傍の他遺跡から搬入された可能性は否定できないが、彩文土器が遠方からの搬入品である可能性は低い。

以上の点から筆者はジャリ A 遺跡における彩文土器づくりの共同体の実態に関して、2 つの仮説を提示する。第 1 の仮説では、彩文土器の出土点数の少なさや、土器生産に関わる遺物・遺構が未だ確認されていない点から、ジャリ A 遺跡には彩文土器づくりの共同体が存在せず、同平原内近傍の他遺跡から彩文土器が搬入されたと考える。それに対し第 2 の仮説では、外部の村落で彩文土器づくりを学んだ熟達した陶工が、ジャリ A 遺跡を訪れて彩文土器をつくり、それまで植物質混和粗製土器をつくっていた在地の陶工に彩文土器の知識・技能を伝達したと考える。第 2 の仮説の場合、無文がほとんどを占める従来の植物質混和粗製土器のなかに単純な彩文を施した土器が稀に見られることから（三木 2014：図 4-4)、植物質混和粗製土器の陶工が彩文土器づくりの見習いとなった可能性がある。そのほか両方の仮説が組み合わさった、搬入品と試作品の彩文土器がジャリ A 遺跡に混在したという状況も考えられうる。

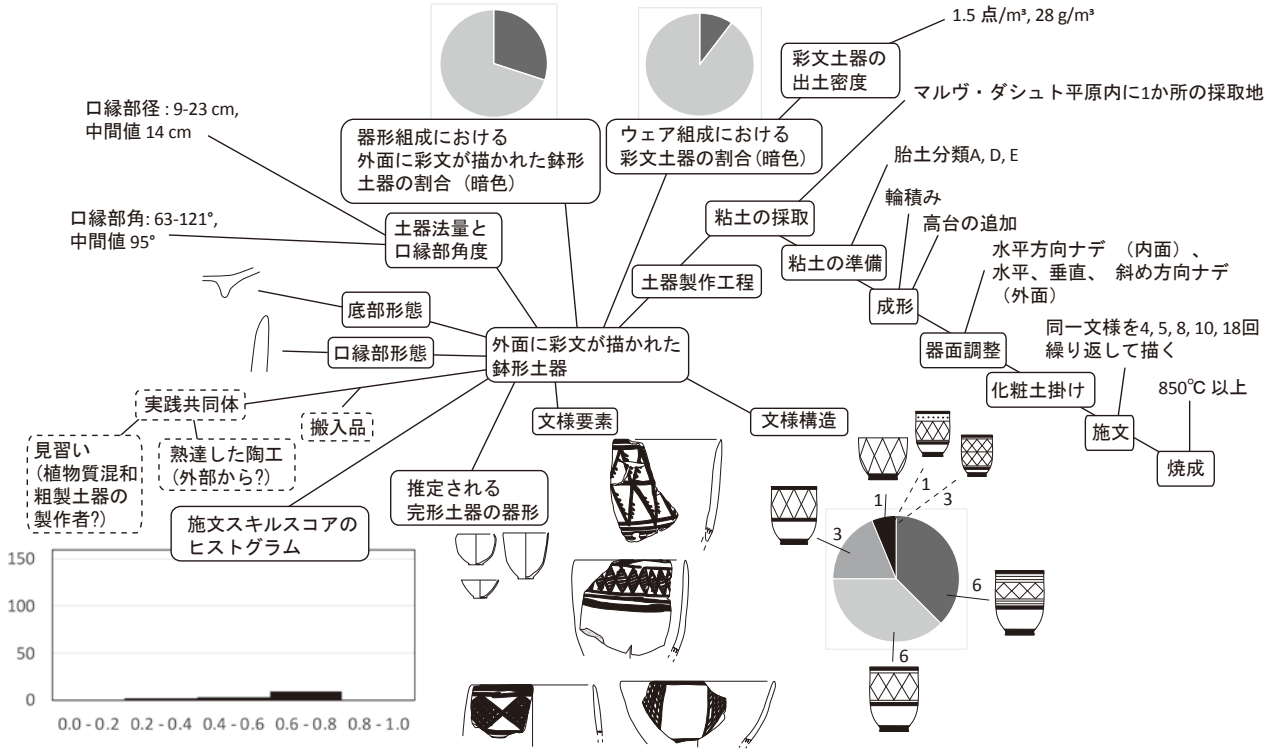

図 3　タル・イ・ジャリ A 遺跡 I 層における土器属性のタングルグラム（図は縮尺不同）

ジャリ A 遺跡における村落共同体内のエンタングルメント

ジャリ A 遺跡の発掘調査概報では、I 層から建築物が確認され、骨角器、貝製品、打製石器、磨製石器、土製品、石製印章らしき遺物 1 点、ビーズ 2 点、土製紡錘車が出土したことが報告されている（Egami 1967; Egami et al. 1977）。考古学的証拠は常に断片的であり解釈には困難が伴うが、ジャリ A 遺跡の居住者たちは、様々なモノと関係し合いながら、穀物栽培、牧畜をおこない、住居を建て、出土した各工芸品の製作に従事していたことが推察される（図 4）。もちろん出土した工芸品を製作していた実践共同体に関するこのような安易な推測は、社会的なもの（実践共同体）を「中間項（intermediary: ラトゥール 2019: 74）」というブラックボックスとして再構築するという、ラトゥールが強く批判した危険性を常に抱えていることに留意すべきである。このほか遺物として検出されていないが、植物質混和粗製土器の器面に残存する編み籠の痕跡に示されているように、編み籠づくりも行われていた。

タングルグラムの図中には加えなかったが、推定された活動はすべて、これらの活動に従事する実践共同体ならびに熟達者や見習いといった成員と関連している。また、村落共同体内の実践共同体同士は必ずしも排他的に存在していたわけではなく、成員が重複している場合もあったと考えられる。ジャリ A 遺跡内における他の実践共同体の実態に関してはいまだ不明な点が多いため、同地域で近年発掘された新石器時代の他遺跡の事例を参考に推察を試みたい。S. ポロック（Pollock）と R. ベルンベック（Bernbeck）は、前 7 千年紀末の土器新石器時代遺跡トレ・バシ（Tol-e Bashi）の物質文化に見られる物質的表現の多様性が乏しいことを根拠に、この地域の新石器時代の生活世界は物質的な表現を抑制し、社会的平等を維持していたと主張する（Pollock and Bernbeck 2010: 287）。筆者はジャリ A 遺跡の土器以外の資料を詳細に分析していないものの、後に述べるギャプ、バクーン A 両遺跡と比較して出土する遺物の種類は少なく、新石器時代の生活世界のように物質表現が乏しかったと推察される。現時点では証拠不足のため踏み込んだ解釈をする恐れは否めないが、物質表現が抑制され、村落共同体内で社会的平等が維持されていた可能性もある。このような村落共同体の中では、新たに登場した彩文土器はジャリ A 遺跡の居住者たちにとっては珍しく、特別なモノだったのかもしれない。居住址に近接して見つかった埋葬址には、それまでの植物質混和粗製土器ではなく、稀少で丁寧に描かれた彩文土器が副葬されていた（Vanden Berghe 1952: Pl. XLIX–L;

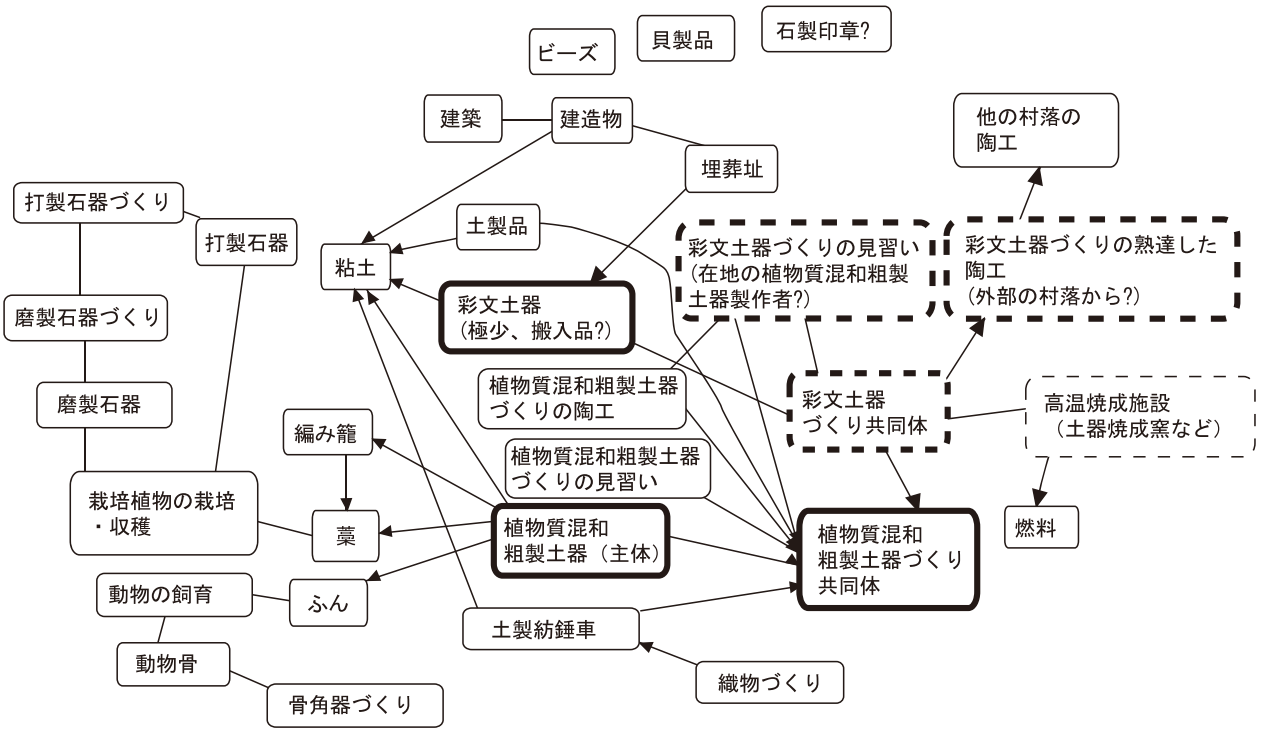

図 4　タル・イ・ジャリ A 遺跡 I 層における村落内のエンタングルメント
太枠は文中で主に論じた人間、モノ、実践共同体を意味する

Egami et al. 1977)。このようなジャリ A 遺跡での彩文土器消費の証拠は、居住者たちにとって彩文土器が特別な意味を有していたことを示唆している。

5. ギャプ遺跡におけるエンタングルメントと実践共同体

ギャプ遺跡における土器属性のタングルグラムと彩文土器づくりの共同体

図 5 ではジャリ A 遺跡からおよそ 300 年後、バクーン中期のギャプ遺跡（前 4700–4500 年）における土器属性のタングルグラムを提示し、彩文土器づくりの共同体に関する考察を試みる。発掘区から出土した彩文土器の 1 m^3 あたりの密度が高いこと（GAT-1 区：79.9 点 / m^3, GAT-2 区：39.1 点 / m^3)、ウェア組成において彩文土器が 90％近い高い割合を占めることから、ギャプ遺跡内では彩文土器づくりが頻繁に行われていたことが示唆される。文様・器形のヴァリエーションも土器の量と並行して増加している。

図 5 で提示された証拠以外の実践共同体に関する証拠として、ギャプ遺跡からは成形および施文スキルの乏しい、小型で内面に彩文が施された彩文土器が確認されている（Miki 2020: Fig. 8. 61)。同時期のラハマタバード（Rahmatabad）遺跡でもこれに類似した土器が確認されており、発掘者たちはこれを製作技法の拙さから、見習いによってつくられたものと推定している[1)] (Bernbeck et al. 2005: 100; Pollock 2015: 57)。この土器には精緻な胎土が用いられていることから、見習いが精緻な胎土へのアクセスを許可されていたことが示唆される。また、その大きさを考慮すると、子どもの手によるものであった可能性もあり、人生の早い段階から土器づくりの見習いが始まっていたことが推察される。

このほかギャプ遺跡の時期からは大型壺形土器を作ることが一般的となる（図 2：B)。胴部最大径と器高が最大で 60 cm 近くまで達する大型壺形土器の存在は、彩文土器づくりの共同体の中で他の陶工の協力を必要とする、共同の成形作業の可能性を示唆している。以上の 3 つの証拠から筆者は、ギャプ遺跡には安定して知識・技能の伝達を行う彩文土器づくり共同体が存在し、見習いから熟達した陶工に至るまでの正当的周辺参加を通じて陶工を育成していた、という解釈を提示する。

ギャプ遺跡における村落共同体内のエンタングルメントと土器生産・消費の証拠

続いてギャプ遺跡の村落共同体内のエンタングルメントでは（図 6)、発掘調査報告書（江上・曽野編 1962）に基づいてモノと実践共同体の関係がつなげられた。この図にはジャリ A 遺跡に見られなかった新たなモノがいくつかみられる。ギャプ遺跡中層以降からは最大粒径 2.5 mm ほどのシルト岩片、方解石片と

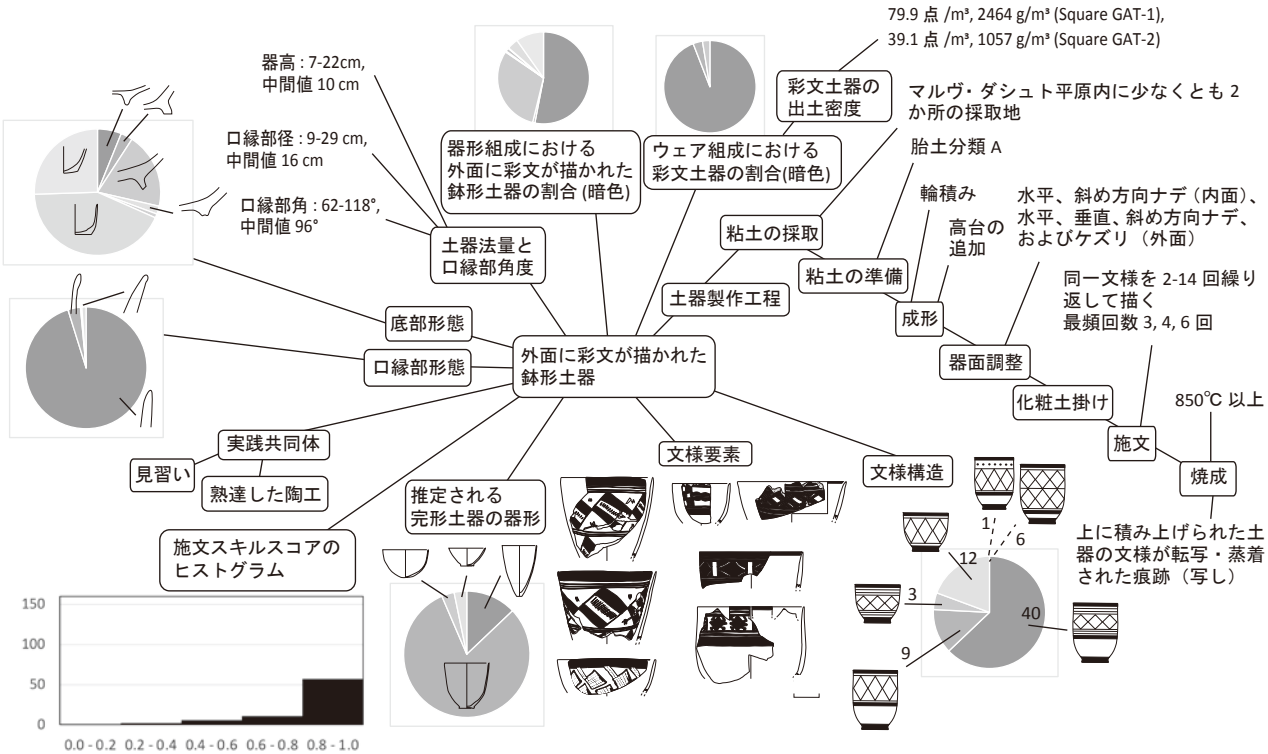

図 5　タル・イ・ギャプ遺跡における土器属性のタングルグラム（図は縮尺不同）

いった鉱物質の混和材を意図的に追加した、鉱物質混和粗製土器という新しい土器が登場する。製作技術、記載岩石学的特徴、化学組成、焼成温度、器形、ウェア組成の割合といった点で、彩文土器と鉱物質混和粗製土器は明確に異なっている。彩文土器と鉱物質混和粗製土器づくりの実践共同体の成員が重複しているかどうか、すなわち、彩文土器づくりの共同体の成員が鉱物質混和粗製土器づくりの共同体にも参画していたかどうかは不明である。鉱物質混和粗製土器がギャプ遺跡以外で生産されて搬入された可能性もある。

ギャプ遺跡からはごく少数の銅製のピンや石製容器も新たに確認されている。銅製品や石製容器が遺跡内で生産されたのか、搬入されたのかは判然としない。このほか土製紡錘車や粘土製の動物土偶は彩文土器と同様の精緻な胎土で作られ、彩文が施され、高温焼成されており、彩文土器づくり共同体との関係が示唆される。ギャプ遺跡の中で彩文土器づくりの共同体は、生産頻度、生産量、必要な経験・スキル、見習いが明確に存在するという点で、他の工芸品生産の共同体とは大きな相違を見せる。

またギャプ遺跡の詳細な発掘報告からは、村落共同体内のエンタングルメントに関する良い手がかりが他にも得られる。第 1 にギャプ遺跡では土器焼成窯の一部と見られる部材や、焼成に失敗した土器片など、土器生産に関する間接的証拠が見つかっている。これらの証拠から、ギャプ遺跡では彩文土器が確実に在地生産されていたことがわかる。第 2 に、土器消費ならびに調理活動に関して、住居内の粘土が何度も上塗りされた方形の焼成施設（GAI-7, 8 区 4 層）、彩文土器で舗装された床面（GAI-3 区 5b 層 , GAT-5, 6 区 9, 12b 層）、オーブン（GAI-3 区 6 層）、そして鉱物質混和粗製土器と円錐台状土製品が共伴してみられる炉址（GAT-1, 2 区 6 層）、といった証拠から推測することができる。鉱物質混和粗製土器はこの土製品を支えにして炉址で食物を調理・煮沸する目的で使用されたと推測される。残滓分析によるこの食物の解明が今後期待される。

ジャリ A 遺跡からギャプ遺跡への通時的変化

上で取り上げた 2 遺跡のタングルグラムを比較し、つなげられた土器属性やモノ、線で表現された関係性のパターン、彩文土器づくりの実践共同体にどのような変化が見られたかを考察する。ジャリ A 遺跡 I 層とギャプ遺跡の外面に彩文が施された鉢形土器（図 3, 5）を例に、遺跡間の土器属性のタングルグラムを比較する。先に言及したウェア組成に占める彩文土器の割合、発掘区 1 m^3 あたりの彩文土器の密度を中心に、器形組成に占める外面に彩文が施された鉢形土器の割合、口縁部角度、文様、文様構造、施文スキルスコアに大きな相違がみられる。土器属性が相互に関係

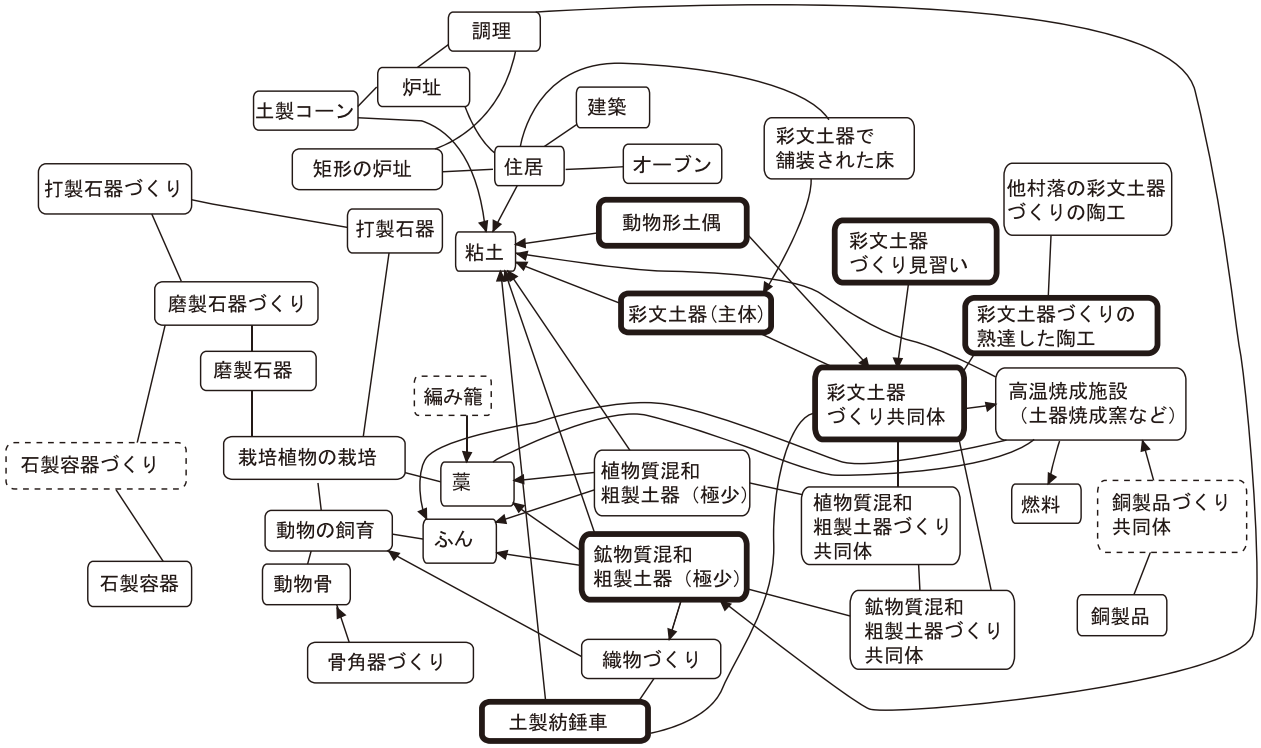

図 6　タル・イ・ギャプ遺跡における村落内のエンタングルメント
太枠は文中で主に論じた人間、モノ、実践共同体を意味する

し、このような幅広く大きな変化がもたらされたと考えられる。その一方で、他の土器属性、例えば製作工程にあまり違いはみられない。

土器属性のタングルグラムの違いから、両遺跡における彩文土器づくりの共同体の違いも示唆される。前章で解釈したように、ジャリ A 遺跡に彩文土器づくりの共同体が存在したかは定かでなく、彩文土器が搬入されたか、もしくは彩文土器づくりの頻度は稀であった可能性がある。一方、ギャプ遺跡では、人生の早い段階から安定した知識・スキルの伝達が行われていたことが示唆された。見習いが彩文土器づくりの中で習得すべきこと（文様・器形のレパートリーなど）も増加している。施文スキルスコアのヒストグラムは高スコア主体のパターンへと変化している。このことは、安定した知識伝達メカニズムが確立されたことを示唆している。しかし、ジャリ A 遺跡の埋葬址から出土した彩文土器から推察されるような、優れた施文スキルを有する熟達した陶工の存在は、ギャプ遺跡では確認されていない。

次に、ジャリ A 遺跡 I 層とギャプ遺跡の村落共同体内のエンタングルメント（図 4, 6）を比較した。土器以外のモノに関しては実際のところ、まだ詳細な研究が行われていないため、どのような変化が見られるか不明である。今後、石器や植物・動物遺存体などの他種類の考古資料を専門とする考古学者がタングルグラムの可視化を行った場合、彼らのタングルグラムは本稿の土器中心のタングルグラムとは大きく異なるものになるだろう。ジャリ A 遺跡のモノ・実践共同体の関係性の絡み合いは、新石器時代の物質・生活世界の延長線上にあると解釈された。一方、ギャプ遺跡では、彩文土器やこれまで村落共同体内に見られたモノと、新たに出現したモノ、例えば鉱物質混和粗製土器、動物形土偶、銅製品、石製容器との間で新たな関係が結ばれた。鉱物質混和粗製土器の煮沸用具としての使用は、調理法に変化をもたらし、食物や食事に関連するモノとの間に新たな関係を創出した可能性がある。また、彩文土器づくりの共同体が大きく変化したことに伴い、彩文の施された円錐台形の紡錘車や動物土偶の製作にも、彩文土器づくりの共同体が関係するようになったと考えられる。

このように、彩文土器づくりの共同体や村落共同体内のエンタングルメントが変容していく過程で、村落居住者にとっての彩文土器の意味も変化していった可能性が高い。第 1 に、口縁部直径およそ 15 cm ほどの外面に彩文が施された深鉢形、ビーカー形土器（図 2：E-OF1, OF2）の増加は、20 cm を超える内面に

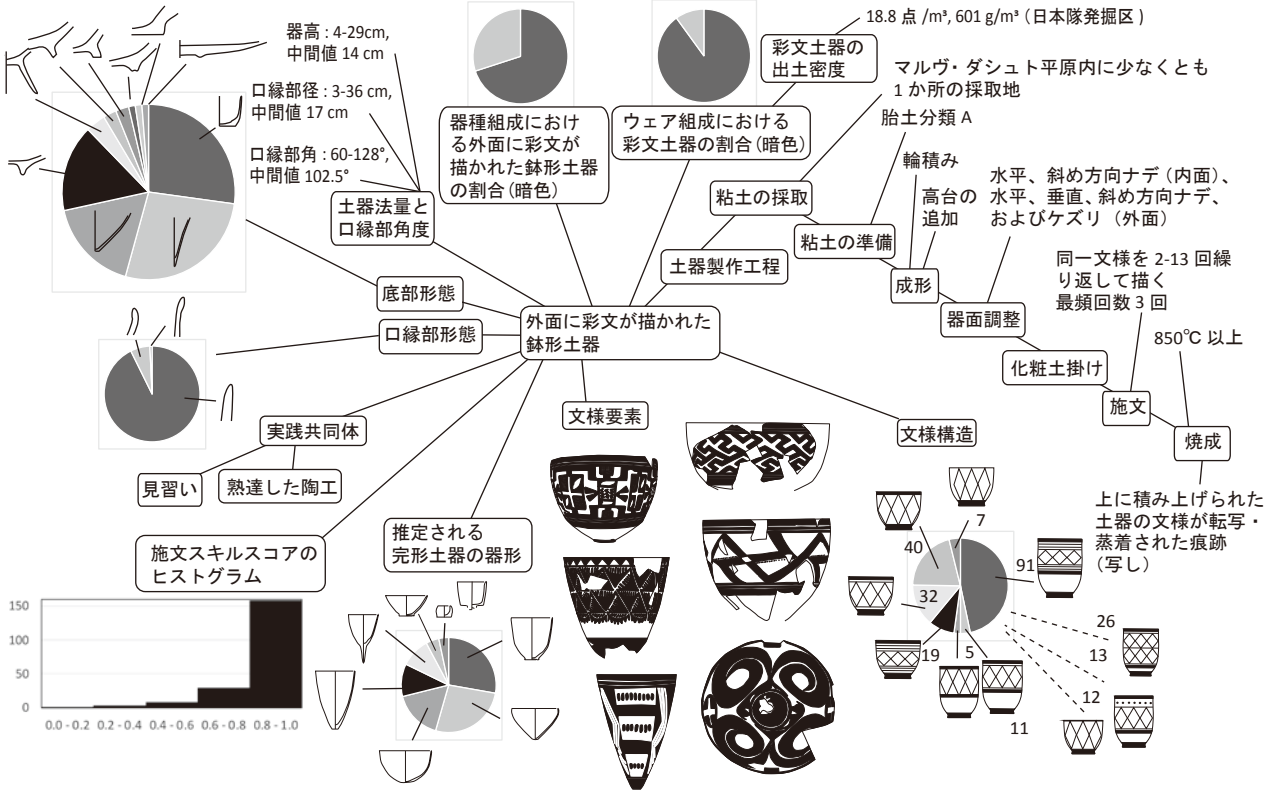

図 7　タル・イ・バクーン A 遺跡における土器属性のタングルグラム
（代表的な文様は Herzfeld 1932: Taf. II-1; Langsdorff and McCown 1942: Pl. 4-3, 4-10, 26-8, 36-13, 53-1 を筆者がトレース。図は縮尺不同）

彩文が施された浅鉢形土器を用いた集団での共同飲食よりも、ディスプレイや個人用の食器としての機能を志向するようになったことを示唆している。ポロックはこの変化が個人化へと向かう流れであると指摘した（Pollock 2012）。第 2 に、彩文土器から新石器時代における社会内平等が崩れ始めたことが間接的に示唆される。一例として大型壺形土器の増加は、液体などを貯蔵することの重要性が増加したことを示唆している。大型壺形土器の貯蔵物は村落内、世帯間での共有物であった可能性もあるが、このような物質的表現は所有する財産の違いを可視化した可能性がある。第 3 に、彩文土器づくりの共同体が発展し、新石器時代よりもはるかに多くの量の土器が生産されるようになった。彩文土器に代表される銅石器時代の物質文化は、新石器時代のように抑圧されるべき対象ではなく、より多く生産され、特に文様の違いを通してより差異化されるべき対象となっていったと推察される。新石器時代とは対照的に、ギャプ遺跡の居住者たちはますます物質的表現においてより一層の多様性を欲しており、彩文土器は彼らの欲求を反映したものであった。次章では最後の分析対象として、ギャプ遺跡よりわずかに年代の新しいバクーン A 遺跡を取り上げる。

6. バクーン A 遺跡におけるエンタングルメントと実践共同体

バクーン A 遺跡における彩文土器づくりの共同体と村落共同体内のエンタングルメント

バクーン A 遺跡（およそ前 4400–4300 年）のタングルグラム（図 7）から読み取れる、彩文土器づくりの共同体に関する重要な点の一つは、これまでの遺跡よりも精巧に描かれた文様を有する土器の存在、つまり卓越した施文スキルを持った陶工の存在を示す証拠が見られる点である。バクーン A 遺跡では重ねられて窯内で焼成されたため、別の文様が蒸着・転写された土器が多く発見されており、特に描かれた文様と同一の転写が多く確認された（三木 2015: 152）。筆者はかつてこの証拠を、熟達した陶工が短い作業期間に同一文様を複数の土器に描いたことを示すと解釈した。また、同一文様（ジグザグ文）を有する完形土器の施文スキルスコアを分析した結果（Miki in prep）、低い施文スキルから高い施文スキルまで存在し、様々なレベルの施文スキルを有する陶工たちが彩文土器づくりの共同体に存在していたことが示された。

バクーン A 遺跡の村落共同体内のエンタングルメントは図 8 にて示されている。バクーン A 遺跡からは様々な種類の遺物が出土している。発掘調査報告書では、壁体を共有する 13 もの建造物の複合体、打製石器、以前よりも多くのヴァリエーションからなる磨製石器（棍棒頭、有溝研磨器、研磨石、ハンマー、石

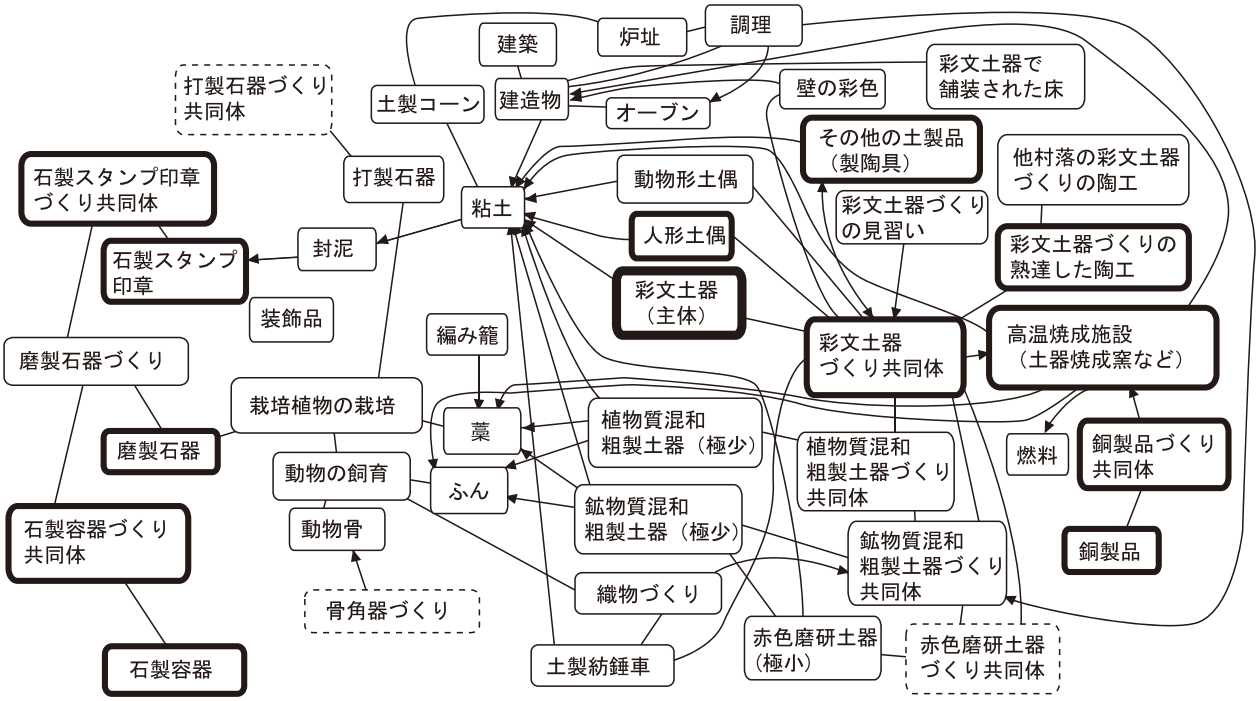

図 8　タル・イ・バクーン A 遺跡における村落内のエンタングルメント
太枠は文中で主に論じた人間、モノ、実践共同体を意味する

板)、土製紡錘車、精緻な胎土でつくられた焼成および未焼成の動物土偶などが出土したことが示されている（Herzfeld 1932; Langsdorff and McCown 1942; 江上・増田編 1962; Alizadeh et al. 2004; Alizadeh 2006)。また他には精緻な胎土でつくられた人形土偶、様々な形態の土製品（管形、リング形、スクレイパー形、角形土製品、焼成用支脚、土弾、屋根部材、小型円盤)、また銅製品（ナイフ、鉤、ピン、鑿、トグルピン、短剣など)、装飾品（ビーズや貝製ペンダント)、石製容器（鉢形、小型壺形、円錐形、大型壺形）が発見された。最後にバクーンA遺跡では、土器以外で最も注目すべき出土遺物として、石製スタンプ印章が挙げられる。

これらの資料から、バクーンA遺跡の居住者は穀物栽培や牧畜といった生業、各種の工芸品生産に従事していたと推測される（図8)。このタングルグラムの中で、いくつかのモノと実践共同体の間の関係を指摘できる。第1に胎土が共通しているため、人形土偶、動物形土偶、土製紡錘車などの土製品の製作は、彩文土器づくりの共同体と密接に関係していると推察される。第2に、石材の加工という点では、磨製石器、打製石器、石製容器、石製スタンプ印章が共通している。第3に、彩文土器づくりでも銅製品づくりにおいても、土器焼成窯や炉などの高温焼成施設を必要とする点が共通し、相互に関係していた可能性が推定される。このように1つの工芸品の生産組織に議論を特化させるのではなく、複数の異なる工芸生産に着目し相互に影響を与えていた可能性を議論する、複数の工芸生産を横断する全体論的アプローチ（Costin 2005: 1041; Brysbaert 2007; Shimada and Wagner 2007）は、今後銅製品や石製スタンプ印章などの詳細な分析を行うことで、より実りある成果を生み出すと期待される。

タル・イ・バクーンA遺跡での土器生産と消費の証拠

先行研究で既に指摘されたように、バクーンA遺跡では、数多くの土器生産と消費に関する証拠が見つかっている。第1に、建造物IIの第2室（III層）から土器の原料と思われる粘土塊が発見された。第2に、建造物IIIの第3室（III層）と建築物IVの第2室と3室（III層）からは、鐙状のスクレイパーといった製陶具が出土した。第3に、発掘者たちは建造物XVIIの第2室（IV層）には小型の土器焼成窯が存在し、この部屋が工房であったと主張している(Langsdorff and McCown 1942: 20)。第4に、バクーンA遺跡では、北発掘区に4基、中央・南発掘区に7基、合計11基の土器焼成窯が発見されている。ここでは特に、バクーンA遺跡における土器焼成窯が同じ地点において長期間利用・維持されていることに着目したい。中央発掘区BB27–37区の4a層には2基の土器焼成窯がある。その上層である2層からも1基の土器焼成窯が発見された。また、BB61–62区では、3層から1基の土器焼成窯が発見され、3基の土器焼成窯がその上の2層からも発見された。以上の証拠から、彩文土器づくりの共同体が同じ場所で長期間にわたって土器焼成窯を維持し、次世代に継承していたことがわかる。

また、バクーンA遺跡における土器や遺物が消費されたコンテクストに関しては、当該遺跡で火災が生じそのまま放棄されたと考えられることから、良好な残存状態を保っている。住居の中には壁に彩色が施されたものが確認されており、壁の彩色と土器に文様を施す実践は関連していたのかもしれない。貯蔵用とみられる部屋には大型壺形土器が原位置で見つかっており、他の器形に比べ貯蔵容器として長期的に利用されていた。またこの貯蔵用の部屋には、美しい彩文が外面に描かれた円錐形の土器も保管されていた。BB62区では彩文土器で舗装された床面が確認されている。建造物内で調理をしていた証拠は、建築物IIの第1室と日本隊の発掘区で確認された。建造物IIとIIIの間の外部空間には、オーブンが設置されていた。

ギャプ遺跡からバクーンA遺跡への通時的変化

外面に彩文が描かれた鉢形土器における土器の属性間の関係（図5, 7）にみられる変化は、土器のかたちに関連する属性（底部形態、法量、推定される器形）と文様要素のヴァリエーションといった、使用者に視覚的に訴えかける属性において顕著である。上記の土器属性は、例えば底部形態が変化して器形が変化し、さらに器形が変化すると文様を描く範囲が変化して文様構造、文様要素のヴァリエーションも変化するというように、相互に連関していたと考えられる。一方、ジャリA遺跡からギャプ遺跡まで著しい増加をみせたウェア組成における彩文土器の割合は、バクーンA遺跡で変化を見せていない。バクーンA遺跡では両面に彩文が描かれた鉢形土器の割合がわずかに増加しており（図2：B)、内面と外面に彩文を有する土器の融合、あるいは新たな関係を示唆している。このほかミニチュア土器（図2：E–OF9)、注口付土器、動物形土器、土器スタンドなどの特殊な器形の出現も、土器の属性における大きな変化として注目すべきである。

この両遺跡における彩文土器づくりの共同体を比較すると、第1に非常に精緻な文様を描く傑出した陶工がバクーンA遺跡に存在していることが、ギャプ遺跡との大きな違いである。傑出した陶工は彩文土器づくりの共同体の中で、強力な中心として大きな役割を果たし、その立場は共同体の周辺に位置する見習いと

非常に対照的であったと推察される。一方、ギャプ遺跡ですでに確立された、長い見習い期間を要し、安定的に彩文土器づくりの知識と技能を伝達するメカニズムは、バクーンA遺跡においても見習いのつくった土器、高スコア中心の施文スキルスコアなどが見られることから、引き続き安定していた可能性が高い。筆者はこの安定した技能習得のメカニズムが、卓越した施文スキルを持つ陶工を生み出す基礎となったと解釈する。彩文土器自体はまた、彩文土器づくりの共同体を固定化することにも貢献した。彩文土器の美しい文様は、バクーンA遺跡の居住者たちを惹きつけるとともに、この魅力が彩文土器づくりの共同体を固定化し、見習いたちに長い見習い期間を課すこととなった。実践共同体論では、実践共同体への参加を通してアイデンティティが形成されるとともに、新参者と古参者の間でいさかいが起こることが指摘されている（レイヴ・ウェンガー 1993: 95, 103; 三木 2020: 50）。このようなより一層安定・固定化された彩文土器づくりの共同体は、成員のアイデンティティ形成に貢献した可能性がある。その一方で、共同体内で熟達した陶工の力が強まることにつながる恐れがあるため、見習いと熟達した陶工の間で対立が深まる危険性も負っていたのかもしれない。

ここで視点を土器から村落共同体全体へと広げ、ギャプ遺跡とバクーンA遺跡の違いを考察する（図6, 8）。第1に、彩文土器づくりの共同体は、バクーンA遺跡に新たに登場した人形土偶や、その他の多様な土製品の製作にも従事していた可能性が高い。また、壁の彩色も陶工の手で行われていたかもしれない。これらの証拠は、バクーンA遺跡の中で彩文土器づくりの共同体が関与する活動がさらに拡大したことを示唆している。

第2に、石材加工活動の変化に着目する。バクーンA遺跡では、ギャプ遺跡よりも様々な種類の磨製石器および石製容器が確認された。特にバクーン後期に出現した石製スタンプ印章は、ギャプ遺跡との明確な違いを示している。ポロックは、石製スタンプ印章は居住者間の不信という新たな関係を示していると主張する（Pollock 2015）。また石製スタンプ印章製作に必要な彫刻スキルに関しては、今後詳細な研究が必要であるが、精巧な文様を土器に描くのと同程度かそれ以上の彫刻スキルが必要だと推測される。彩文土器づくりの共同体と磨製石器、石製容器、石製スタンプ印章といった石材加工に従事する共同体との関係は未だに不明である。バクーンA遺跡で出土した石製加工品が他地域から搬入された可能性もある。しかしバクーン期において500年ほどの間変化を続け確立された、彩文土器づくりの共同体にみられる熟達した工人と見習いの関係が、バクーンA遺跡における石材加工の共同体の形態やその急速な発展に影響を与えている可能性もある。

さらに彩文土器、ならびに彩文土器づくり共同体の意味もバクーンA遺跡において変化を見せた。第1に彩文土器はバクーンA遺跡の居住者たちにとって身近なモノであり、当然視されていた。彩文土器は土器片を転用したスクレイパー、紡錘車、彩文土器片で舗装された床面など、さまざまな場面で転用されていた。第2にその一方で、より多様、より意匠の凝らされた彩文が描かれた土器は、そうした彩文土器をつくる／つかう人々とそうでない人々の間の差異を可視化する役割を果たした。貯蔵用の部屋に保管された精緻な彩文を有する土器は、この特殊な彩文土器が世帯間で共有されたのではなく、個人的、もしくは世帯内で保管された財産である可能性を示唆している。以上のことは、精緻な文様が描かれた彩文土器が居住者間の格差を可視化させ、固定させるという帰結をもたらし、それ以前、特に物質的表現の抑制により社会的平等が保たれた新石器時代よりも、社会内不平等が拡大するおそれが増したことを示唆する。またバクーンA遺跡の多くの土器焼成窯は、集落から近接した場所にあっただけでなく、同一の地点で長期間にわたり維持されていた。集落近くでの土器焼成による大気汚染の影響も考慮する必要があるが、彩文土器づくりの共同体、そして村落共同体にとって土器焼成窯は機能的、象徴的に重要な意味を有していたのかもしれない。

7. おわりにかえて

本稿で筆者はバクーン期の土器生産組織と村落共同体の通時的変化、という問題に取り組んだ。これまで土器生産組織を論じるにあたり用いられてきたシステム論的視座、あるいは工芸の専業化研究の枠組みを避け、その代わりに、土器生産組織を関係性の観点から、土器生産に関わる人とモノとの間にある無数の関係として捉えた。土器生産組織における関係性を辿る上で、筆者は実践共同体とエンタングルメントの概念に依拠した。バクーン前・中・後期にそれぞれ属するジャリA遺跡、ギャプ遺跡、バクーンA遺跡における土器属性のタングルグラムと村落共同体内のエンタングルメントを可視化し、彩文土器づくり共同体と村落共同体の通時的変化を論じた。第7章で筆者は第1に、バクーン後期に偏った土器生産組織に関する先行研究でこれまで示されてこなかった、この土器生産組織の通時的変化を3段階にまとめて提示する。第2にシステム論的な観点から復元された土器生産組織と本稿の成果を対比することで、工芸の専業化を論じてきた研究とは異なる本研究の独自性を明確にする。最後にバクーン期の土器生産組織研究に関する今後の課題

と方向性を述べる。

関係論的視点からみたバクーン期における土器生産組織の通時的変化

1）ジャリA遺跡（バクーン前期）で彩文土器が受容されたとき、搬入品として到来したのか、彩文土器づくりの共同体が存在したかは現時点では定かでない。この共同体が存在した場合、知識は安定して伝達されず、植物質混和粗製土器を主に製作する陶工たちは、タル・イ・ジャリA遺跡の外から訪れた熟達した陶工たちと何らかの交流を持ちながら、稀に彩文土器を製作していた。

2）ギャプ遺跡（バクーン中期）の段階になると、土器生産量、文様、器形など、さまざまな土器属性の関係が大きく変化した。これら属性同士の関係性がより絡み合う中で、彩文土器づくりの共同体は、熟達した陶工と見習いで構成され、より長い見習い期間を要する、安定的・固定的で、徒弟制的な形態へと移行していった。彩文土器の激増と鉱物質混和組成土器、銅製品、石製容器などの新たな工芸品の出現は、村落共同体内のエンタングルメントの中に新たな関係を生み出し、居住者間で社会的平等を維持することを試みていた新石器時代の生活世界から脱することとなった。

3）最後にバクーンA遺跡（バクーン後期）では、視覚的に強調される土器属性（文様や器形）における関係性が大きく変化し、彩文土器はより精巧につくられ差異を強調する方向へと向かうことになった。施文スキルにおいて卓越した陶工が彩文土器づくりの共同体に現れるとともに、彩文土器づくりの共同体自体も村落共同体内で拡大していった。彩文土器づくりの共同体は、他の新しく現れた工芸品（銅製品、石製スタンプ印章）の製作に従事する共同体と、相互に影響を与えていた可能性もある。そして精緻な文様が描かれた彩文土器の意味は共有物から財産へと変化し、居住者間の格差を可視化することで、さらなる社会内不平等をもたらしたと推察される。

以上、関係論的視点からできるだけ多数の土器属性や考古学的証拠を検討した結果、知識・技能の習得という点で彩文土器の生産組織が固定化していく傾向、それとともに社会的平等も崩れていくことを明らかにした。従来の工芸の専業化に関する研究と異なり、専業／非専業という二元論的な見方に縛られずに生産組織の変化を論じた点に本稿の意義がある。

システム論的視点からみたバクーン期における土器生産組織の通時的変化

筆者は関係論的視点からこのように論じた一方で、同じデータ・分析結果を用いて、工芸の専業化と結びついたシステム論的観点から土器生産組織を復元する。その上で関係論的視点から得られた成果と比較を試みる。筆者は4つの変数（生産コンテクスト、生産密度、生産規模、生産強度）と8つの工芸の専業化の類型からなる、C. コスティン（Costin）の提示する生産組織の変数アプローチ（Costin 1991）を利用して生産類型を検討した[2)]。

【生産コンテクスト】現時点で3遺跡から得られる証拠では、専業工人がエリートに従属していた度合いであるこの変数を評価することは困難である。アリザーデは石製スタンプ印章と封泥から、管理活動を行ったエリートの存在を指摘し、彩文土器づくりもエリートに従属した専業であったと主張したが（Alizadeh 1988）、彼の主張に疑問を投げかける研究者も存在する（Fraser 2008; Pollock 2015）。現時点では証拠不足のため、筆者はバクーン期にエリートの明確な存在は確認されないという立場を取り、従属専業は確認されていないと解釈する。

【生産密度】この変数は専業工人が一様に分布しているか、あるいはある地点に集中しているかを示す。ジャリA遺跡（バクーン前期）では、まだ土器生産関連遺物・遺構が発見されておらず、測定不能である。ギャプ遺跡（バクーン中期）では、土器生産関連遺物が発見されたのみであり、ギャプ遺跡内で生産地区が他の地区と隔離されていたかどうかは不明である。バクーンA遺跡（バクーン後期）からは11基の土器焼成窯が発見されている。土器焼成窯や製陶具は北・中央・南発掘区に一様に分布していた（久米 2001; Fraser 2008）。

【生産規模】この変数は生産組織のための労働が親族関係あるいは賃金に基づくかの尺度となる。バクーン期の遺跡からはこの変数を直接示す考古学的な手がかりはない。久米、フレイザーは同一村落内の拡大世帯といった、親族関係に由来する労働が主だったのではないかと推測している（久米 2001; Fraser 2008）。

【生産頻度】最後の変数は生産者が工芸品のために費やす時間の長さ、すなわち常勤か非常勤かを示す。この変数への手がかりの一つは、発掘区1 m^3 あたりの彩文土器の点数（密度）である。彩文土器の出土密度はギャプ遺跡から激増している。もう一つの間接的な手がかりは施文スキルスコアのヒストグラムである。ジャリA遺跡以外の2遺跡において、安定したスキルの習得と維持があったことを示している。またバクーンA遺跡では、より精巧な文様から推測されるように、文様を施すのに著しく時間を費やすようになり、常勤的になった可能性がある。

【生産組織の類型】以上4つの変数を考慮した結果、バクーン期の土器生産組織はコスティンの8つの生産類型のうち、すべて個別専業に分類された。3遺跡の間では生産密度と生産頻度において若干の違いがみら

れるのみであった。このように工芸の専業化研究が立脚する分類システムが、バクーン期の土器生産組織の変化を論じる上では十分機能しないこと、コスティンの変数は実際の考古資料から検討することが困難な場合が多いことが明らかとなった。筆者はバクーン期の土器生産組織を論じるにあたり、工芸の専業化に関わる変数や生産類型にアプローチするよりも、人間とモノの関係性に着目し、かつ知識・技能を習得・伝達する場である実践共同体という観点からアプローチした方がより有効であると結論づける。

しかしながら今回の研究は、対象遺跡をマルヴ・ダシュト平原に限定し、かつバクーン期のみを対象時期とした、よりミクロな視野から土器生産組織に取り組んだものであった。今後、長期的な観点に立ち、バクーン期の土器生産組織をラピュイ期（およそ前4100–3500年）、バネシュ期（Banesh：およそ前3400–2700年）といったそれ以降の時期の土器生産組織と比較する際には、システム論的観点は依然として有効である可能性がある。

今後の課題

バクーン期の土器生産組織と村落共同体に関する研究を進展させていくには、第1に、依然としてバクーン後期に属するバクーンA遺跡のデータ量だけが多く偏っている状況のため、バクーン前・中期においても同等量のデータを獲得する必要がある。これらの時期に該当する新遺跡の発掘調査が期待される。第2に、バクーン期から後続するラピュイ期へ、どのように土器生産組織が変化したのかを探る必要がある。ラピュイ期になると無文の赤色磨研土器が主体となるが、なぜ陶工たちは土器に文様を施さなくなったのか、赤色磨研土器づくりの共同体は知識・技能の習得・伝達において彩文土器づくりの共同体とどのように異なるのかはまだ明らかではない。バクーン前・中期同様に新遺跡の発掘調査が待たれる。第3に、対象範囲をマルヴ・ダシュト平原から拡張し、よりマクロな視点からイラン南西部における彩文土器の受容・展開の実態を論じる必要がある。ファールス州一帯にバクーン文化の彩文土器が確認されている。この彩文土器づくりの知識・技能の一部が各村落の彩文土器づくり共同体間で共有・伝達・継承されつつも、各村落独自の展開を見せる背景に関しても議論が続いている。この背景には移住もしくは外婚制による、さまざまなジェンダー・年齢の熟達した陶工や見習いの移動・交流があったと考えられる。ファールス州における複数地域の間で土器の受容・展開の実態、土器生産組織を比較していくことが、この背景を探る上で重要である。筆者は以上3点の課題に取り組むことが、バクーン期における彩文土器の生産組織をさらに理解する上で必要だと考える。

謝辞

本稿は筆者がベルリン自由大学に提出した博士論文『*Pottery Making and the Communities During the 5th Millennium BCE in Fars Province, Southwest Iran*』の第11章である考察に加筆し、一報の論文の形に書き改めたものである。本稿の執筆にあたり、指導教授であるベルリン自由大学のラインハルト・ベルンベック教授からは、論文執筆時並びに口頭試問時に、本稿に関する多くのアドバイスを頂いた。また東京大学在籍時の指導教授である東京大学総合研究博物館の西秋良宏館長からは、東京大学総合研究博物館所蔵のタル・イ・ギャプ遺跡、タル・イ・ジャリA遺跡、タル・イ・バクーンA遺跡出土土器という貴重な資料を扱う機会を頂いただけでなく、本稿の執筆時にも有益なコメントを頂いた。また2名の査読者ならびに編集委員会の方々からも、本稿をより良くする上で大変有意義なコメントを頂いた。本研究はDAAD奨学金、日本学術振興会海外特別研究員制度による研究成果の一部である。ここに記して感謝申し上げる。

註

1）ラハマタバード遺跡では精緻な粘土を用いた小型鉢形の彩文土器のほかにも、それほど精緻でない粘土を用いて低温で焼成され、外表面に子どものものと思われる指紋痕跡が残った無文の小型鉢形土器が、一か所からまとまって確認されている（Bernbeck et al. 2005: 103–104; Bernbeck et al. 2020: Abb. 7）。発掘者たちはこれを、彩文土器をつくり始める以前に遊びとして土器づくりを学んだ証拠だと解釈している（Bernbeck et al. 2020）。

2）コスティンは工芸の専業化に関する生産類型、変数を設定した論文を1991年に発表した後も、変数を細分、追加するなど自身のアプローチのアップデートを試みてきた（Costin 2001, 2005）。さらにコスティンが近年発表した、考古学的証拠から工房（workshop）を論じた研究に関するレビューの中では（Costin 2020）、変数同士の結びつきを前提に生産類型を判断するアプローチの限界を明確に認識している。筆者はコスティンが過去30年のうちに工芸品の生産組織における方法論的態度を大きく変化させてきたことを認識しているが、本稿ではあくまで関係論的視点から得られた結果と対比させるため、1991年に発表された枠組みを取り上げた。

参照文献

Alizadeh, A. 1988 Socioeconomic Complexity in Southwestern Iran during the Fifth and Fourth Millennia B.C.: The Evidence from Tall-e Bakun A. *Iran* 26: 17–34.

Alizadeh, A. 2006 *The Origins of State Organizations in Prehistoric Highland Fars, Southern Iran: Excavations at Tall-e Bakun*. The University of Chicago Oriental Institute Publications, Vol. 128. Chicago, Oriental Institute of the University of Chicago.

Bernbeck, R., H. Fazeli and S. Pollock 2005 Life in a Fifth-Millennium BCE Village: Excavations at Rahmatabad, Iran. *Near Eastern Archaeology* 68/3: 94–105.

Bernbeck, R., J. L. Schönberg, H. Fazeli Nashli and J. Röwer 2020 Südiranische Kindheit um 4500 v. u. Z. *Das Altertum* 65: 185–202.

Brysbaert, A. 2007 Cross-Craft and Cross-Cultural Interactions During the Aegean and Eastern Mediterranean Late Bronze Age. In S. Antoniadou and A. Pace (eds.), *Mediterranean Crossroads*, 325–359. Athens, Pierides Foundation.

Costin, C. L. 1991 Craft Specialization: Issues in Defining, Documenting, and Explaining the Organization of Production. *Archaeological Method and Theory* 3: 1–56.

Costin, C. L. 2001 Craft Production Systems. In G. M. Feinman and D. T. Price (eds.), *Archaeology at the Millennium: A Sourcebook*, 273–327. New York, Kluwer Academic/ Plenum Press.

Costin, C. L. 2005 The Study of Craft Production. In H. D. G. Maschner and C. Chippindale (eds.), *Handbook of Archaeological Methods*, 1032–1105. Lanham, Altamira Press.

Costin, C. L. 2020 What is a Workshop? In A. K. Hodgkinson and C. L. Tvetmarken (eds.), *Approaches to the Analysis of Production Activity at Archaeological Sites*, 177–197. Oxford, Archaeopress.

Donnellann, L. (ed.) 2020 *Archaeological Networks and Social Interaction*. Routledge Studies in Archaeology. New York, Routledge.

Duistermaat, K. 2016 The Organization of Pottery Production: Toward a Relational Approach. In A. Hunt (ed.), *The Oxford Handbook of Archaeological Ceramic Analysis*, 114–147. Oxford, Oxford University Press.

Egami, N. 1967 Excavations at Two Prehistoric Sites Tepe Djari A and B in the Marv-Dasht Plain. In A. U. Pope and P. Ackermann (eds.), *A Survey of Persian Art from Pre-Historic Times to the Present*, 2936–2939. Shiraz, Pahlavi University.

Egami, N., S. Masuda and T. Gotoh 1977 Tal-i Jarri A: A Preliminary Report of the Excavations in Marv Dasht, 1961 and 1971. *Orient* 13: 1–7.

Fraser, J. A. 2008 An Alternate View of Complexity at Tall-e Bakun A. *Iran* 46: 1–19.

Herzfeld, E. 1932 *Iranische Denkmäler Reihe I. A: Steinzeitlicher Hügel bei Persepolis*. Berlin, Dietrich Reimer Verlag.

Herzfeld, E. 1941 *Iran in the Ancient East: Archaeological Studies Presented in the Lowell Lectures at Boston*. London, Oxford University Press.

Hodder, I. 2012 *Entangled. An Archaeology of the Relationships between Humans and Things*. Chichester, Wiley-Blackwell.

Hodder, I. and A. Moll 2015 Network Analysis and Entanglement. *Journal of Archaeological Method and Theory* 23: 1066–1094.

Ingold, T. 2000 *The Perception of the Environment: Essays on Livelihood, Dwelling and Skill*. New York, London, Routledge.

Knappett, C. 2011 *An Archaeology of Interaction. Network Perspectives on Material Culture and Society*. Oxford, Oxford University Press.

Langsdorff, A. and D. E. McCown 1942 *Tall-i Bakun A: Season of 1932*. Oriental Institute Publications, Vol. 59. Chicago, University of Chicago Press.

Miki, T. 2020 *Pottery Making and the Communities During the 5th Millennium BCE in Fars Province, Southwest Iran*. Ph.D. dissertation, Berlin, Free University of Berlin.

Miki, T. 2021 The Numbers of Motif Units on Painted Pottery During Chalcolithic in the Kur River Basin, Fars Province, Iran. In Herausgeber*innenkollektiv (eds.), *Pearls, Politics, and Pistachios: Essays in Anthropology and Memories on the Occasion of Susan Pollock's 65th Birthday*, 183–192. Berlin, ex oriente.

Miki, T. (in prep) Deciphering Skills of the Prehistoric Painting Technique: Case Study from the Painted Pottery of the 5th Millennium BCE from Tall-e Bakun A (Fars Province, Iran). In N. Kallas and R. Palermo (eds.), *Proceedings of Broadening Horizons* 6, Vol. 2.

Mills, B. J. 2017 Social Network Analysis in Archaeology. *Annual Review of Anthropology* 46(1): 379–397.

Peeples, M. 2018 *Connected Communities. Networks, Identity and Social Change in the Ancient Cibola World*. Tuscon, University of Arizona Press.

Pollock, S. 1999 *Ancient Mesopotamia: The Eden That Never Was*. Cambridge, Cambridge University Press.

Pollock, S. 2012 Commensality and Social Life from the Neolithic to the Bakun Period. In H. Fahimi and K. Alizadeh (eds.), *Nāmvarnāmeh. Papers in Honour of Massoud Azarnoush*, 31–42. Tehran, IranNegar.

Pollock, S. 2015 Material and Social Worlds in Neolithic and Early Chalcolithic Fars, Iran. *Origini* 38: 39–63.

Pollock, S. and R. Bernbeck 2010 22. Neolithic Worlds at Tol-e Baši. In S. Pollock, R. Bernbeck and K. Abdi (eds.), *The 2003 Excavations at Tol-e Baši, Iran: Social Life in a Neolithic Village*, 274–287. Archäologie in Iran und Turan, Vol. 10. Mainz am Rhein, Philipp von Zabern.

Shimada, I. and U. Wagner 2007 A Holistic Approach to Pre-Hispanic Craft Production. In J. M. Skibo, M. W. Graves and M. T. Stark (eds.), *Archaeological Anthropology. Perspectives on Method and Theory*, 163–197. Tucson, University of Arizona Press.

Sumner, W. M. 1994 The Evolution of Tribal Society in the Southern Zagros Mountains, Iran. In G. Stein and M. S. Rothman (eds.), *Chiefdoms and Early States in the Near East*: *The Orgazinational Dynamics of Complexity,* 47–56. Madison, Prehistory Press.

Vanden Berghe, L. 1952 Archaeologische Opzoekingen in de Marv Dasht Vlakte (Irān). *Jaarbericht Ex Oriente Lux* 12: 211–220.

Wenger, E. 1998 *Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity*. Cambridge, Cambridge University Press.

江上波夫・曽野寿彦（編） 1962『マルヴ・ダシュト タル - イ - ギャプの発掘：1959』東京大学東洋文化研究所。

江上波夫・増田精一（編） 1962『マルヴ・ダシュト タル - イ - バクーンの発掘：1956』東京大学東洋文化研究所。

久米正吾　2001「イラン、コル川流域、タル・イ・バクーン A 層の再検討：銅石器時代村落の世帯と組織の復元に向けて」『オリエント』44 巻 2 号　3–27 頁。

小泉龍人 2016『都市の起源 古代の先進地域＝西アジアを掘る』講談社選書メチエ。

三木健裕　2013a「紀元前 5 千年紀、イラン南西部の時期区分

をめぐって―タル・イ・ギャプ遺跡の再検討―」『西アジア考古学』14 号　37–48 頁。
三木健裕　2013b「紀元前 5 千年紀、イラン南西部、ファールス地方への鈍黄色黒彩土器の受容と展開―タル・イ・ギャプ遺跡出土土器を中心的事例として―」『東京大学考古学研究室研究紀要』27 号　51–78 頁。
三木健裕　2014「イラン南西部銅石器時代における鈍黄色黒彩土器の受容―タル・イ・ジャリ A 遺跡出土土器の分析―」『オリエント』57 巻 1 号　2–17 頁。
三木健裕　2015「イラン南西部、マルヴ・ダシュト平原銅石器時代における土器の変化―タル・イ・バクーン A, B 遺跡出土土器の製作技術研究―」『オリエント』58 巻 2 号　139–155 頁。
三木健裕　2020「工芸品の生産組織を問い直す―工芸の専業化とむすびついた生産組織の研究手法の課題、および生産組織の関係論的な研究手法に関する一考察―」『西アジア考古学』21 号　41–59 頁。
ラトゥール、B.　2019『社会的なものを組み直す：アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局。
レイヴ、J.・ウェンガー、E.　1993『状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加』産業図書。